



野幌森林公園のクマゲラ一家 // その後

〈クマゲラ観察グループ〉

文責 村野紀雄

はじめに

一昨年（一九七五年）春に、私たちはクマゲラの営巣と、三羽の雛の巣立ちを観察し、野幌森林公園のクマゲラ一家として、ささやかな記録を同年の本誌（第一四号）に掲載していただいた。

この一家は、その後しばらくは巣立った穴のある木の近辺でよく見られたが、やがて緑濃く繁った森の木々に隠されて、どこにいったかわからなくなった。たまに、だいた離れた遊歩道で独得の鳴き声が聞かれるぐらいだった。しかし、夏を過ぎるころから、彼らは森の外にも出るようになって、百年記念塔の回りや国道や、鉄道を越えて江別市の大麻田地、吉井の沢などにも姿を見せるようになった。そのときには、すでに親は一緒ではなかったらしく、観察されるのはいつも身体やや小さなやつが三羽一緒のところだった。

一方、彼らの生まれ育った穴は、その後、彼らのうちの二羽のねぐらとなっていたことが、相当あとになって気づかれている。秋の夕方、この穴の木を見あげると、穴口から身を乗り出して外の様子をうかがう一羽と、その上の梢の高いところに互い違いに止まっている二羽が、日の沈んだ青暗い空に幻想的なシルエットを描いていた。

冬が過ぎ、二度目の春が訪れると、穴の中をしきりと穿つ二羽のクマゲラがあり、穴は再び営巣に用いられることが確かとなった。しかし、確かとなったところにこの穴は、

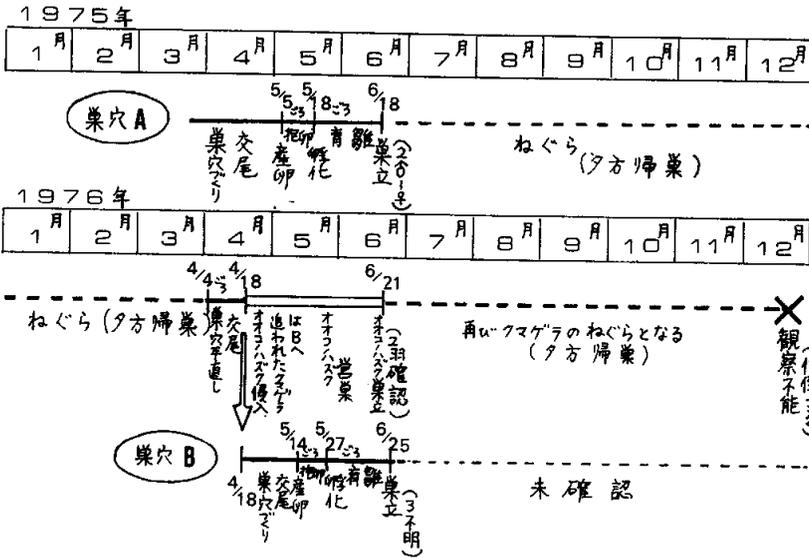
オオコノハズクにまんまと奪われてしまった。そしてクマゲラは、別の木に急いで巣を造らなければならなかった。こんな観察のほかに、野幌の森の中で別のクマゲラを観察する機会にも恵まれたので、再び誌上を借りて報告する。

1 その後の営巣について

一九七六年、残雪のいまだ深い四月四日のこと、雌のクマゲラが古巣（前年に造られた巣穴で、本誌第一四号に記録したもの。以下Aという）の内壁を削っていて音がしきりに響く。このクマゲラは、前年の一家の親か子かどうかは判別できないが、一家がこのあたりを根城にしている状況から、一家のどれかであることは間違いないようだ。ゴジュウガがやってきて、この穴に巣材を運びこんでは自分の巣にしようと頑張る状況も前年と同じだった。一週間もこんな状態がつづいて、その間、付近でこのクマゲラが交尾するのが観察されたし、近くに別のねぐらをもっていることも確認された。こうして、この年における一家の営巣体制は万全になったかに見えたが、その一週間後にクマゲラはこの巣を放棄しなければならなかった。何者かがこの巣に入りこんで、家主を追いついてしまったのだ。

四月十八日のこと、クマゲラは何度も巣口に趾をかけたが、穴の中をのぞきこむだけで、中には入らなかつた。そしてついには穴を離れ、近くの木にいつもと違った様子で、あちこち飛び移りはじめた。はじめにこの巣穴Aから七〇mぐらい東に離れたトドマツの木（胸高直径五〇cm、樹高約二五m）に穴を穿ちかけ、そこからまた二〇mぐら

クマガゲラー家営巣のうごき



ねぐらから出る時刻

観察日	10/3	11/3	11/7	11/14	11/22	11/28	12/5
日の出時刻	6.08	6.11	6.16	6.25	6.36	6.42	6.50
天候	雨	晴	晴	雨	雪	雨	あられ
ねぐら	A 性時刻	♂ 6.21	♂ 6.13	♂ 6.32	♂ 6.41	♂ 6.31	♂ 6.36
	D 性時刻		♀ 6.16	♀ 6.20	♀ 6.23		
	E 性時刻		♂ 6.17				

ねぐらに入る時刻

観察日	10/23	10/30	11/3	11/16	11/13	11/21	11/27	12/4
日の入時刻	16.40	16.31	16.25	16.21	16.14	16.08	16.04	16.01
天候	くもり	くもり	雨	薄曇り	薄曇り	雪のち	雪	雨
ねぐら	A 性時刻	♂ 16.35	♂ 16.30	♂ 16.02	♂ 16.12	♂ 16.31		♂ 15.48
	D 性時刻	不明		♀ 15.54	♀ 16.17	♀ 16.02		
	E 性時刻		♂ 16.12		♂ 15.55		♂ 15.59	ヤマクワ 16.00

い離れたトドマツ (胸高直径三二cm、樹高約二〇m) に穴をあけたりしている。明らかに、新しい巣穴開発のために、適当な木を選んでいる様子と思われた。そして、その後一週間たった四月二十五日には、新しい巣(以下Bという)の位置を決めこんだらしく、巣穴Aから南に数百m離れた林の中の一本のトドマツに、雌雄二羽のクマガゲラが交代で穴をあけているのが発見されている。

四月二十五日の時点では、その穴の大きさは、クマガゲラの頭部が入る程度だったが、四月二十九日には、穴を

穿つクマガゲラの身体がすっぽり入って、わずかに尾羽が巣穴の外に出る程度の大きさになった。
五月に入ると、縦方向にまで進んでいるらしく、穴の中で身体を回転できるようになり、それまでとはちがって、頭から入って頭から出てくるようになった。
五月二日には、穴の近くで交尾が確認されたが、その後も交尾の様子を見ると、短い間に集中的な回数をもって行われた前年とはちがって、割合に長期間に散発的に行われた。

選木以来一カ月ほどで巣穴が完成し、五月十四日ごろに産卵が行われた。これは前年度の産卵より半月も遅かったが、その後の経過は順調で、五月の終りごろに孵化したらしく、六月十二日には巣口に三羽の元気な雛(二♂一♀)の姿が確認されている。そして、産卵の日から数えて三十五日前後になる六月二十五日に雛たちは巣立ちを終えた。幼鳥(雛)たちはその後しばらくは近くの遊歩道などでよく見られ、あるときにはエゾイタヤの枝に水平にとまって枝上の虫(蟻のようなもの)をついばんでいるのが観察されている。

この新巣Bは、胸高直径六〇cm、樹高約三〇mもあるトドマツの大木(写真)に造られ、葉色が悪く、枯枝の多い木であることや、造られた巣の口の西北西方向を向いていることなど



巢立間近な幼鳥と雌親



巢造り ほりとった木片をいきおいをつけて巢外に放り出す



幼鳥の採餌 親が餌を運んでくるまでの間エゾイタヤの枝にとまっていたこの幼鳥は枝上の蟻らしきものをついばんだ

が、前年度の巢Aの状況と一致していたが、穴の位置が巢Aの倍近い、およそ一四mの高いところにあり、穴のすぐ上に枯枝が何本かできているなどちがうところもあった。穴のすぐ上の枯枝は、外敵の侵入拠点となる可能性が強いし、あたりにはカツラ、イタヤなどの樹木が密生して、巢口近くまで枝を伸ばすなど、巢口からの眺望もきかず、従来いわれているクマガラの巢穴の適性からは、大きくはずれているように見えた。営巣を急ぎすぎて、適当な木を選ぶ余裕がなかったのか、あるいは条件の最良な木は、もう

このあたりになくなくなったのか、などと考えさせられた。

2 もう一つの営

巢について

六月十三日、巢穴Aから南へ六mほど離れた森の中で一つの巢穴（以下Cという）が見つかった。見つけられたときは

あたかも巢立ちの最中で、巢口に二羽の雛が姿を見せ、他の一羽の雛の音が巢の近くの木立の中にひびいていた。この日のうちに他の二羽の巢立も完了したらしく、翌日にはすでに巢穴は空になっていた。その後しばらくこの巢穴は空屋だとばかり思われていたが、冬に入って、夕方一羽のクマガラがねぐらに使っているのが観察されている。そしてこの木は翌年の一月に、支障木として伐倒されてしまい、いまはない。

3 ねぐらについて

ねぐらはいまのところ、四つの木に五つ確認されている。そのうちの二つは、前年と本年に造られたA・Cの新巢が、育雛の終わった後にねぐらとなったものだが、いまはその木はない。あとの三つは、相当な古穴で、はたしてこの穴がクマガラによって掘られた穴かどうかはわからないが、現在ねぐら専用に使われているものである。このうちの二つ（D・E）は、巢穴から一五〇mほど離れたところの一本のシナノキの老木にあるもので、その一つDは、Bで育雛中のクマガラのねぐらとなっていたらしく（抱卵、育雛期には親の二羽が夜に巢穴で雛と一緒に過ごし、もう一羽の親は別の穴へねぐらに入って過ごす……本誌十四号参照）、夕方巢Bの方向から飛んできて穴に入ることが多かった。もう一つ（F）の穴は、ねぐらとして使われていた巢Aの木が伐倒されてなくなったあとに発見されたものだが、ねぐらDから約一〇mのところのシナノキの老木にあった。

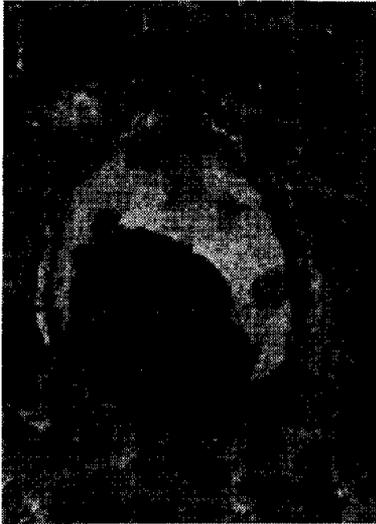
前述のようにDのねぐらは、ほとんど立枯状のシナノキにあり、胸高直径六五cm、高さ二五mもの大木で、遊歩道から見える位置にあった。その木には、三つの穴（下から順にD・E・X）があいていて、上の二つの穴は、幹の中ではつながついていたため、クマガラはXから入ってEの穴から出ることもあった。巢Bでの育雛中には最下の穴Dだけの利用だったが、秋になると、Eの穴にも他のクマガラが入るようになった。十二月の観察では、Eの穴には雌が、Dには雄が入ること

が常ではあったが、Dにヤマゲラが入ったこともあった。

これらのねぐらは、大体同じクマゲラが使っているようだったが、育雛期間の夜にひなを抱いて過ごすのは雄ばかりだったという昨年の観察とはちがって、夕方、巣穴にもぐりこんで出てこない雌と、一方でねぐらに入りこんだ雄の姿を確認している。またねぐらへの出入の仕方はいろいろあって、夕方、ねぐらの近くで待っている私たちの前に、遠くの方からけたたましく鳴きながら現われ、ねぐらの傍に止まってまたひとしきり鳴



オオコノハズク親



オオコノハズク幼鳥-巣立直前

き声をあげてから、やっと穴に入ることもあれば、一直線に無音で穴のところに飛んでき、あつという間に穴にもぐりこんでしまうこともあった。また出るときは、朝まだき、穴口からぬつと顔を出して、しばらく外の様子を見たり、えで飛んでいたり、そんなこともなしに、いきなり穴から飛び出していたりすることもあった。

いずれにせよ、ねぐらに入る時刻とねぐらから出る時刻はほぼ決まっており、十二月の一連の観察では、ねぐらに入る時刻は午後四

時前後一〇分間の間、ねぐらから出る時刻は午前六時半の前後一〇分の間に限られていた。これは日の入、日の出時刻にはほぼ一致していて、ねぐらからの出入は外の明るさにも影響され、雪とか雨の暗い日には、出る時刻はいつもよりやや遅く、入る時刻は早めだった。

4 オオコノハズクについて

クマゲラが営巣途中にして見棄てた巣Aに、オオコノハズクが侵入して雛を育てていることに気づいたのは、五月二十八日晚のことだった。まだ薄明るい午後七時ごろ、遊歩道を帰途につく者の目に、ぼろくずのようなものが、巣Aの口をふさいでいると写った。思い出してみると、それ以前には巣口のところに茶色い羽毛がこびりついていた、普通なら近寄るはずのゴジュウガもよりつかないなど、変な感じではあった。その後、夕方には同じような状態で観察されたが、日中巣口に顔を出すことはあっても、穴口の奥のほうに少ししか顔を見せないの、傍を通る大勢の遊歩者に気づかれることはなかった。

外からのぞくことはかなわないが、中では着々と産卵・抱卵・育雛が行われたらしく、六月二十日の朝晩に巣口から身を乗り出している二羽の大きな雛を初めて確認している。ところが、その翌日の夜から朝までの観察や、その後の観察でも再びオオコノハズクの姿をこの巣に確認することができなかった。二十日の確認は巣立ち直前の幼鳥だったらしい。幼鳥たちは二十日の夜から二十一日の夕方までの間に巣立ったと思われる。これは、クマゲラから巣を奪ってからはほぼ二カ月目になる。その後のオオコノハズクの行方はわからない。オオコノハズクの巣立ったあと、この木は再びクマゲラのねぐらに用いられていたが、十二月の中ばすぎに伐倒されて消滅した。

5 観察の要点

- (1) 一九七六年には、野幌森林公園の中で、二つがいの営巣を観察し、それぞれ三羽の幼鳥(それぞれ、二舎一早と三不明)が巣立った。
- (2) 前年度に営巣したと思われるクマゲラ(一家)は再び同じ穴に営巣しかなかったが、オオコノハズクに穴を奪われて、新巣を別のところに造った。巣立ちは産卵が遅れたため、前年度より半月ほど遅れた。
- (3) 古巣はねぐらに用いられていることが多く、新巣も、育雛後にはねぐらとなって

いた。一九七六年にはねぐらとなつてゐる穴を五つ確認した(古い穴三、新巢跡二―た
だしいまはない)。

(4) クマゲラが新しく巢を造つた穴は、いずれもトドマツの老令過熟木(三例)で、
巢口の向きは大体一致していたが、巢口の高さは一致しなかった。

(5) クマゲラの掘つた穴がオオコノハズクの育雛やヤマゲラのねぐらに用いられた。

(6) オオコノハズクがクマゲラ使用中の巢穴に割りこみ、およそ二カ月目に自分の子
(確認二羽)を巢立たせた。

6 思 う に

一昨年来、野幌に完全に定着したクマゲラは、昨年もその数を確実に増した。巢立を
終えた幼鳥たちが公園のあちこちに姿を見せて、多くの人を楽しませるようになった。

そのニュースは、道内よりかえつて本州方面に反響を呼んでゐるらしく、プロミナー
を肩にした本州の学生たちが大挙して野幌にやってくるようになった。旅程のつまつて
いる彼らには、容易に足をのびせる札幌近郊で、憧れのクマゲラにお目にかかれるとい
うことが、大変な魅力であつたことはいふまでもない。野幌のクマゲラは、今後も、道内外
に評判を呼んでいくにちがいない。

しかし、これからもこのクマゲラたちが野幌に安住し、数を増してゆくかという
それには悲観的な見方をせざるを得ないところである。胸高直径が六〇cmもの太く大
きな木で、クマゲラが巣造りに選びそうな木は、いまや野幌でも非常に少なく、その木
のほとんどは土壌条件などの影響もあつて、それ以上は生長できずに衰弱し、早晚枯れ
る運命にある。最近二、三年の春秋の突風で吹き倒されたものも多く、これらの残つた
木も枯れることがわかつてゐるので、危険防止ということで、早めに伐られて造材され
ることにもなる。林の中の風倒木は、鳥たちに餌の虫を供給し、この数年に出た大量の
風倒木が、クマゲラ増加の一要因になつたとも考えられるが、これらの風倒木も、森林
経営上から整理されてなくなつてきてゐる。

営林署などでは、風倒跡地や伐採跡地に植林を行っているが、急激に減んでゆく大木
の跡をすぐにも継げる適当な後継樹もないので、野幌の森の最近の風致的変化はいちじ
るしい。大木の林立した原始のよそおいを失つて、若い造林地の部分が増えだつてきてい
る。四季を通じて林内への人の出入も多くなつてクマゲラたちには住みづらくなつてき

ていることは確かだ。自然休養林、鳥獣保護区、道立自然公園など様々な自然を重視す
る施策に守られていながらも、本来の自然を失つてゆく状況を見るのはどうにもなさけ
ない気持ちにさせられるところである。

お わ り に

この報告は多くの人の観察情報を参考にしまつたもので、観察グループの藤林忠
雄、黒沢 隆、柳沢信雄・千代子、村野紀雄の記録が中心となつてゐる。また、一部林
内の観察には当時公園事務所に在職中の村野が主にあたり、札幌営林署、野幌森林公園
事務所の協力もあつたので記して感謝したい。また本誌第一四号において、観察グルー
プ参加者に羽田恭子の名前が抜けていたのでここに補遺させていただきたい。

追 記 観察グループの心配にもかかわらず、今年(一九七七年)も野幌ではクマゲ
ラの営巣が二組確認された。そしてその一つでは、ムクドリがクマゲラの親を追い払つ
て、自分の身体より大きな雛に給餌するのが見られたり、その雛のくちばしに奇形が発
見されたりなど、かなり特異な事件が展開されたので、次回には、これらのことを中心
にとりまとめたといふ考えてゐる。

いったいに野鳥の保護と、その記録には宿命的ともいえる矛盾がともなつてゐる。ク
マゲラに関する記録と情報も野幌が札幌に近いだけに多くの人の目を野幌に向けさせ、
それらの人たちの中には、現地のクマゲラにかなり強引なアプローチをはかる人もで
ている。それは、クマゲラの静かな営巣環境を乱すばかりでなく、その周囲の森林植生を
踏みしだき、守られるべき森の自然を荒らすことにもなつてゐる。私たちの保護資料を
得るためのささやかな観察も、クマゲラの営巣をおびやかしてゐる事実にはかわりない。
しかし、幸いに野幌のクマゲラは、遊歩道の近くに営巣することが多いので、営巣木
の根元まで立ち入らなくとも、クマゲラをおびやかさず、静かに双眼鏡で眺められる
ことが多い。クマゲラの保護と、記録と、そして多くの人の観察の望みを満足させるた
め、これらの路傍の営巣木は今後、増々重要な存在となるであらう。そして野幌森林公
園は自然保護の立場から道はずれて一般の人は森の中に入れないようになってゐるの
だから、森の中はおのずからクマゲラのサンクチャリティとして尊重し、それを犯すべ
きではないと考えてゐる。